

# 「左傾学生・生徒」調査を読む

竹内 洋 (京都大学)

## 1 左傾学生の時代

昭和八年二月二〇日、作家小林多喜二が、治安維持法違反のかどで逮捕され築地署に送られた。三時間におよぶ凄惨な拷問でその日の午後七時四十五分、死亡した。それから一ヶ月ほどのち三月二九日午前九時。著名な華族の三女岩倉靖子が治安維持法違反で検挙された。罪状は「目遂、党技術部メンバー、党運動資金一九八円ヲ提供」。ここで「目遂」というのは治安維持法における国体を変革することを目的とした「結社ノ目的遂行」罪の略語である。兄嫁はじめ家人は動転したが、靖子は着替えをし落ち着いたようすで連行された。靖子に取り乱した様子になかったのは、二ヶ月以上前の一月十八日には華族のなかから最初の検挙者がで、二月に学習院高等科卒業の数人が検挙されていたから、靖子はこの日のくことを予期していたからかもしれない。

靖子の父は明治の元勲岩倉具視の孫公爵具張。母は西郷隆盛の弟西郷従道の娘桜子である。靖子は学習院女学部、日本女子大学校附属高等女学校を経て、日本女子大学校英文科に進学する。昭和七年三月、花嫁修行のため大学を二年で中退する。靖子は、日本女子大学校在学のころから共産党シンパだった。

靖子が検挙された昭和八年の共産党関係検挙者数は、過去最高で一萬四千六百二十二人。しかし、起訴になった者は八・八% (一二八五人) だった。靖子と同じ三月に検挙された左傾華族のほとんどはすぐに「悔悛」し、一、二ヶ月で釈放された。靖子は、特高によってどのような活動を誰とおこなったかを書くようにいわれた。応じれば靖子も一、二ヶ月で釈放されたはずである。しかし、靖子は否認をつづけた。治安維持法違反受刑者の半数以上は、近親愛などで転向したといわれるが、靖子は家族や知人の説得にもおおじなかった。

七月三日に起訴され、市ヶ谷刑務所に収監される。獄中では、板敷きの床に端座し、板机にむかって静かに読書していた。同年一二月十一日釈放。八ヶ月

半ぶりで自宅に戻る。その十日後、自室で頸動脈をナイフで切って自殺する。「生きてゐることは、凡て悪結果を結びます。これ程悪いことはない」と知りながら、この態度をとることをお許し下さいませ。…」という遺書を枕もとに残して。二十一歳を目前にした死だった (浅見雅男『公爵家の娘』リポート、一九九一年、「純情な、余りに純情な岩倉公令妹の死」『サンデー毎日』一九三四年一月七日)。

靖子の検挙は、女子大を退学してからだったが、靖子のように活動し、検挙された学生は当時、相当いた。この年 (昭和八年) 専門学校以上の学生生徒で検挙された者は全国で六二七人。大学生四四三人、高等学校生徒一二八人、専門学校生徒五六人である。このうち女子は、大学で四人、専門学校で六人だった。

図1は大正一四年から昭和一五年までの学生 (大学・高校・専門学校・中等学校) の左傾事件数、検挙者数、起訴者数、(学校による) 処分者数の推移を年度ごとにみたものである。事件数、検挙者数、起訴者数、処分者数のいずれの指標においても昭和三年からの増加傾向がいちじるしいが、昭和三年は三・一五事件 (三月一五日未明から一道三府二七県にわたって共産党、労働組合評議会、無産青年同盟関係者など千六百人の一斉検挙) があり、左翼運動の興隆の一方で司法当局による左翼活動家検挙がきびしくおこなわれたときである。事件数と処分者数は昭和六年、検挙者数は昭和七年、起訴者数は昭和八年がピークで、昭和九年以後、いずれの指標においても急速に退潮する。

左翼思想や運動と連動して授業料値上げ反対や学友会解散反対などをスローガンに同盟休校などの学校騒動も頻繁になる。左傾学生の時代は「学生騒動慢性時代」(大正十五年から昭和六年) (菊川忠雄『学生社会運動史』中央公論社、一九三一年) でもあった。そして、こうした学校騒動の背後では左翼学生の指導者が糸を引いているとみなされていた。

文部省は、こうした左傾の風潮や左傾学生増大に手をこまねいていたわけではない。左傾教授を依願退官に追い込んだり、新人会などの学内の社会科学研究会を解散させたりした。昭和三年十月には専門学務局内に思想問題に対処する学生課を新設し（のちに学生部、思想局、教学局に格上げされた）、直轄の大学・高校・専門学校に学生（生徒）主事を設置するとともに、学生生徒の思想講習、善導講師の派遣、善導書籍の刊行をおこなう。また、一般学生生徒の生活調査や処分されたり検挙されたりした左傾学生生徒調査をおこなっている。岩倉靖子のところで示した昭和八年の学校類型別の検挙学生数や起訴学生数もこうした当時の文部省調査から集計したものである。

本発表は、この時期のいくつかの左傾学生生徒調査を資料に三つの課題にせまりたい。ひとつは、大正末期から昭和初期にかけて検挙されたり、処分を受けた左傾学生の輪郭を描くことである。かれらは、成績がわるかったり、貧困な家庭の出身者だったのか、それとも逆に成績がよく富裕な家庭の出身者だったのか。ふたつめは、母集団にあたる学生数を考慮しながらどのような学校類型（高等学校・専門学校・大学）が左翼運動による検挙学生を多く輩出したのか。それはどうしてなのか。三つめの課題は、左傾学生は司法当局や学校から処分を受けたが、そうした処分に学校差はなかったのかどうか、男女差はなかったのかどうか。あったとしたら、どのような差があり、なぜそういう処分の軽重の差がでたのだろうか。

## 2 健康・家庭・成績

## 3 検挙学生輩出率

## 4 分散する制裁のまなざし

## 5 おわりに

これまでの知見をまとめると、つぎのようになる。およそ調査は、調査項目から調査者の嚮導仮説が読み取れるものだが、昭和初期の左傾学生生徒調査の調査項目をみると、二つの嚮導仮説が読み取れる。ひとつは左傾学生に不健康、貧困、成績不良、家庭

欠陥などの属性的特質がありはしないかという仮説である。再分析の結果こうした仮説は棄却された。もうひとつの仮説は、左傾学生の学校類型別の差異である。この仮説のほうは有効である。輩出率などの新たな指標を加えての再分析の結果は、高等学校が左傾運動の母胎となっていたこと、ただし高等学校生はいち早く左傾運動にコミットしたが、左翼活動からの撤退も早かった。左傾学の処分などの制裁は、帝国大学生に相対的に寛大で、専門学校生や女子学生には厳しかった。以上が左傾学生・生徒調査の再分析から得られた知見である。

図1にみることができるように昭和九年以後、学生の左傾活動も学生騒動も停滞する。学内でピラがまかれたりデモがおこなわれることがほとんどなくなった。左傾学生の時代の終わりとともに、学生気質の変質言説も多くなる。最近の学生には専門知識以外の政治経済や思想が無知で内省が乏しく、功利的な「類似インテリ」学生が氾濫している（大宅壮一「類似インテリの氾濫」『中央公論』一九三七年三月号）とか、学校の勉強以外は大衆雑誌である『キング』程度しか読まない「キング学生」（三木清「学生の知能低下に就いて」『文藝春秋』一九三七年五月号）が多くなった、とかの言説が登場する。昭和十三年にある新聞記者は座談会で端的につぎのように述べている。「昭和六七年の所謂社会運動の盛んな頃には、大学といふものが非常に非難されたけども、人間としてはあの時分の学生は、今の連中よりは出来てゐると思ふな。今の連中は型に嵌つて、今のは何だか官吏の息子さん達のやうな感じがしますね」（「座談会 若きインテリは語る」『日本評論』一九三八年九月号）。

学生が左傾運動をしていた時代や学生騒動があったころの学生は「人間として出来ていた」「今の連中は型に嵌っている」というノスタルジーがはじまっている。どこかで聞いた話である。さらに、左傾学生の時代がおわった昭和十年代初期に高等学校や大学などのエリート学生が霊術を行使する「ひとのみち」教団に多数入信したことがニュースとなった。これもまたわれわれがついこの間経験したことではなからうか。